

このところ、学術論文の捏造、改竄、剽窃という耳にするだけで頭が痛くなるような言葉が世間を賑やかさせてきた。かつてのシェーン事件、黄事件や、最近の製薬会社で行われたようなデータの取り扱いが許されざる不正であることは言うまでもなく、最近、話題になっている案件も、現象の真否にかかわらず報道を見る限り、悪意のある取扱いのように見受けられ、不正と判断されたのは妥当であろうと思う。もし、それが問題なしと判断されていたら、今後、学術研究の信頼性を常に疑ってかからなくなってしまったかもしれない。

耳にする捏造や改竄といった不正行為を腹立たしく思う一方で、どこまで他人事でいられるのか心配になってくることがある。そうした行為が起きないように注意を払ってはいるが、どこまで徹底できているであろうか。これまで、学生等、共同研究者の持ってきた結果をもとに議論する際、手法や結果が理に適って見え、そこから導かれる主張や論旨が妥当ならば、それらが悪意による取扱いを含んでいるかどうか疑念を持つことはほとんどなかった。論文等の査読をする際においても、データは正当なもの信じ、不正がないか疑ったりはせず、論文の価値を判断することが多いであろう。

恥ずかしながら、自分自身の研究活動においても、全く無関係とそう自信を持てるものではない。実験や数値計算、理論解析を行う際、自分が期待していたような結果でなければ、試料、実験装置、ソースコード等の不備を疑い、目を丸くしてそれらのバグを探していくが、いったん望んでいたような結果が出始めれば、バグ探しの熱意と精度は少なからず減退しているように感じられる。このデータ点は邪魔だなあと感じてしまうことも少なくはなく、そうしたデータ点を消すことはないが、実験全体ではなくそのデータ点近辺の実験のやり直しに留まり、欲しいデータを得たらそこで満足してしまっている。時間に追われていることもあり、日々のノートの記録も徹底できてはならず、こうしたことは捏造や改竄等の温床になるのかもしれない。自分のアイデアに対する思い込みというのは少なからず必要であろうし、その思い込みがデータに対する目を曇らせることなく研究を続けることはそう容易ではないのではなかろうか。また、自分の主張がプレッシャーとバイアスを掛けて、共同研究者にそうした行為を誘発させはしないか心配にもなってくる。二重投稿についても同じようなことで、同じ結果を複数の学術論文に投稿することが大きな不正であることは重々承知しているものの、学会等でのアブストラクトや抄録になると、別の学会で作ったものと、まるでコピーしたような類似した言い回しになることは否定することができず、それが不正に当たりはしないか、毎度心配になってくる。(単に、投稿規則を精読していないためであろうが・・・)

今回の事件に対して研究者は全て、それぞれの思いや考えがあると思う。上記の私の文章にも同意できず、腹立たしく読んでいる人も少なくないであろう。あまりこうした自分の考えを発信する性分ではないが、久しぶりに編集後記が回ってきたのをいい機会だと思い、普段、思っていたことを残すことにした。支離滅裂な文章になっている点はどうかご容赦いただきたい。

(モコ太郎)